

## 詩篇38-41篇 「過去の痛みの中で」

### 1A 痛悔の祈り 38

1B 御怒りへ慄き 1-10

1C 罪の痛み 1-8

2C 主の前での嘆き 9-10

2B 友の忌避 11-22

1C 主以外の沈黙 11-15

2C 救いの求め 16-22

### 2A 黙する待望 39

1B 命の儚さ 1-6

2B 主からの鞭 7-13

### 3A 嘆きの中の救い 40

1B 神への賛美 1-10

1C 神の奇しい業 1-5

2C 御心への服従 6-10

2B 追いつく災い 11-17

1C あざ笑う者への卑しめ 11-15

2C 救いを愛する者の賛美 16-17

### 4A 弱者への心遣い 41

1B 裏切り者からの救い 1-9

2B 御前での立ち上がり 10-13

## 本文

詩篇 38 篇を開いてください。38 篇から 41 篇までを学びますが、これで第一巻を終えることになります。午前中にお話したとおり、ここの箇所は病の中にいるダビデの姿を見ることができます。サムエル記にも列王記、歴代誌にもダビデが病に罹った記述はありません。けれども、どこかの時点で罹ったものと思われます。

ただ、彼が罪を犯した後と思われます。バテ・シェバとの姦淫の罪、そしてウリヤを殺した罪のため、預言者ナタンは、ダビデの家から剣が離れることはないと言を受けました。ダビデの息子アムノンがタマルを凌辱し、そしてタマルの兄アブシャロムがアムノンを殺しました。そしてアブシャロムは、人々の心を自分になびかせて、エルサレムを父から奪い取ることとなります。ダビデの人生の後半は、このように自分の犯した罪が波及した結果を見ることとなります。それでダビデは、どこかの時点で病に罹っている時に、過去の自分の犯した罪の傷を思い出していたのでしよう、過去の罪を病の中で思い出してはそれを赦してくださいと神に請っています。そして自分がそのよう

な病を持ったから、ダビデから離れて敵対する者たちも出てきたようです。

### 1A 痛悔の祈り 38

#### 1B 御怒りへ慄き 1-10

#### 1C 罪の痛み 1-8

38 記念のためのダビデの賛歌 38:1 主よ。あなたの大きな怒りで私を責めないでください。あなたの激しい憤りで私を懲らしめないでください。38:2 あなたの矢が私の中に突き刺さり、あなたの手が私の上に激しく下って来ました。

ダビデが何をもって、今、神の怒りを受けていると感じているのでしょうか？次をご覧ください。

38:3 あなたの憤りのため、私の肉には完全なところがなく、私の罪のため私の骨には健全なところがありません。38:4 私の咎が、私の頭を越え、重荷のように、私には重すぎるからです。38:5 私の傷は、悪臭を放ち、ただれました。それは私の愚かしさのためです。38:6 私はかがみ、深くうなだれ、一日中、嘆いて歩いています。38:7 私の腰はやけどでおおい尽くされ、私の肉には完全なところがありません。38:8 私はしびれ、砕き尽くされ、心の乱れのためにうめいています。

ダビデが、肉体に傷ができて、そこから悪臭を放っているような病に罹っています。腰が火傷で覆い尽くされているとあり、ある人は性病に罹ったという解釈をしています。ダビデがバテ・シェバ以外に姦淫の罪を犯してはいないので、どうしてでしょうか、そばめの一人との間で移されたのでしょうか、分かりません。午前中話したように、激しい肉体の痛みの中で罪を感じていました。それは、直接の罪かもしれないし、直接関係しないけれども過去に犯した罪を思い出しているのかもしれないし、それとも病そのものがアダムの罪から始まっているからなのかもしれません。おそらく、二番目の、過去に犯した罪を、病の中で見出しているのではないかと思います。私の罪が、私の咎が、私の愚かしさと自分の犯したものとして話しているからです。

病を持つということ自体が苛酷であります。それはただ痛みを持つということではなく、元々、人は病を持つように造られていないからです。そこには、やはり人には罪があるという現実を否が応にも知らされる苦しみの時であります。

#### 2C 主の前での嘆き 9-10

38:9 主よ。私の願いはすべてあなたの御前にあり、私の嘆きはあなたから隠されていません。38:10 私の心はわななきにわななき、私の力は私を見捨て、目の光さえも、私にはなくなりました。

ダビデは、今の鬱積した思いを主の前にぶつけています。覚えていますか、私たちは前回の学びで、悪に対して怒るな、ねたむな、主の前に静まって、主を耐え忍んで待てという格言を読みました。今、病が癒されたいという思いや、主の許しがあって患っている病を、その苦しい思いを周

困の者にはなく、主の前に吐き出しています。

## 2B 友の忌避 11-22

### 1C 主以外の沈黙 11-15

38:11 私の愛する者や私の友も、私のえやみを避けて立ち、私の近親の者も遠く離れて立っています。38:12 私のいのちを求める者はわなを仕掛け、私を痛めつけようとする者は私の破滅を告げ、一日中、欺きを語っています。

自分の病が感染するものだったのでしょうか、愛する者や友さえも避けました。思い出すと、ヨブもそのような重い病で自分から遠く離れて立っていかれたし、聖書ではらい病の人たちが隔離されます。今、エボラ熱が蔓延している国の状況を見ると、心が痛みます。患者の人で死んだ人々は、道端で死体が転がっていても放置させられているような状態です。病を抱くと、このように人々を引き離す力を持っています。さらに、ダビデを貶めるための敵が虎視眈々とその機会を待っていて、この状況を狙い撃ちすることが十分に予測されます。

38:13 しかし私には聞こえません。私は耳しいのよう。口を開かないおしのよう。38:14 まことに私は、耳が聞こえず、口で言い争わない人のようです。38:15 それは、主よ、私があなを待ち望んでいるからです。わが神、主よ。あなたが答えてくださいますように。

ダビデは、それら敵に侮られる隙を作らないために黙りんこを決めています。事実、それを待ち受けているのです。現代であれば、例えばマスコミがキリスト教の中をセンセーショナルに書き立てて、その嘘が回るということがあるでしょう。ですから、たとえ、自分の今していることが決して間違っていないとしても、黙っているのです。そして、主がこの思い煩いを知ってくださり、主が救いを成し遂げてくださるのを耐え忍んで待つのです。そのために、痛みをそのまま主の前にぶつけます。

### 2C 救いの求め 16-22

38:16 私は申しました。「私の足がよろけると、彼らが私のことで喜ばず、私に対して高ぶらないようにしてください。」38:17 私はつまずき倒れそうであり、私の痛みはいつも私の前にあります。38:18 私は自分の咎を言い表わし、私の罪で私は不安になっています。38:19 しかし私の敵は、活気に満ちて、強く、私を憎む偽り者が多くいます。38:20 また、善にかえて悪を報いる者どもは、私が善を追い求めるからといって、私をなじっています。

自分の病について、罪の告白が必要ならばそれを行います。罪を告白するということは善の行ないでありますし、その他ダビデはいろいろな善を求めていました。こういったことに、敵はかえってつけいてさらにダビデを責め立て、貶めようとしています。神の前では自分を弱くすることが善です。しかし、自分の弱みを見せると付け入るのが、この世であり、高ぶりであります。

38:21 私を見捨てないでください。主よ。わが神よ。私から遠く離れないでください。38:22 急いで私を助けてください。主よ、私の救いよ。

主に対して必死の救いの祈りを捧げています。これが、ダビデの主への切なる祈りです。このように私たちは、必死に主の前に必要を持って行っているのでしょうか？そうではなく、周りの人々に自分の苦悩を言い回っているのでしょうか？もちろん、自分のことを祈ってもらい、信頼する兄弟に自分の過ちを話すことはとても良いことです。これは続けなければいけません。しかし、究極的には主のみ答えがあり、救いがあることを信じて、主の中でその嘆きを消化するのです。

## **2A 黙する待望 39**

39 篇はその続きです。主にのみ拠り頼む中で、心の中で起こっている苦悶を言い表しています。

### **1B 命の儚さ 1-6**

39 指揮者エドンのために。ダビデの賛歌

エドンは、ダビデが礼拝賛美を指揮するよう指名した奉仕者の一人です(1歴代 16:41)。

39:1 私は言った。私は自分の道に気をつけよう。私が舌で罪を犯さないために。私の口に口輪をはめておこう。悪者が私の前にいる間は。39:2 私はひたすら沈黙を守った。よいことにさえ、黙っていた。それで私の痛みは激しくなった。39:3 私の心は私のうちで熱くなり、私がうめく間に、火は燃え上がった。そこで私は自分の舌で、こう言った。

ダビデは悪者に、自分の言葉の揚げ足が取られることのないようにひたすら黙っています。「よいことさえ、黙っていた。」とあります。これが辛いですね、良いことついて、称賛に値することについて、それを語りたいことは当たり前です。しかし、ある時にはそれさえも語らないことが賢明である状況があります。しかし、もう我慢できなくなっています。

39:4 主よ。お知らせください。私の終わり、私の齡が、どれだけなのか。私が、どんなに、はかないかを知ることができるように。39:5 ご覧ください。あなたは私の日を手幅ほどにされました。私の一生は、あなたの前では、ないのも同然です。まことに、人はみな、盛んなときでも、全くむなしいものです。セラ 39:6 まことに、人は幻のように歩き回り、まことに、彼らはむなく立ち騒ぎます。人は、積みたくわえるが、だれがそれを集めるのかを知りません。

ダビデは、我慢できなくなった時でも、「主よ」と言っています。やはり、他者に語るのを彼は拒み、主に対して自分の悩みを打ち明けています。その内容は、「如何に自分の生涯がはかないか」にあります。なぜそんなことを今、ダビデが話しているのか？悪者が語っていること、その中傷について、また騒動について、中身がないことを指摘したいからです。私たちの周りで起こる、大きな騒

ぎについて、それに注目することがいかに空しいかは、その中に巻き込まれると忘れてしまいます。そのことが如何に人生にとって大切なものであるかと錯覚するのです。

しかし、自分の齡がいかに短いかを知れば、その日が囀は数えるほどしかないことを知れば、しなければいけないことを取捨選択します。そしてもっとも大切なことだけを行います。モーセもこう言いました。「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。(90:12)」ダビデにおいては、彼は病によって自分が間もなく死ぬことも覚悟していたのでしょう。当時、病に罹ればそれは治療ではなく死に面しているということが非常に多いことを考えなければいけません。そこで、自分についてのあることないこと、いろいろな噂が気にかけているのも馬鹿らしいということ自分を言い聞かせているのです。

私たちも同じ人生の行路を辿っています。私たちの人生は数えるほどです。それは若い人も同じです。癌に罹ると多くの人は驚きますが、ある意味でみなが癌に罹っており、余命何年かということなのです。ですから、主のために行なうこと、永遠の報いにつながることに集中しなければなりません。主のために行なうことのみが、永遠に残るのです。

## 2B 主からの鞭 7-13

7 主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです。8 私のすべてのそむきの罪から私を助け出してください。私を愚か者のそしりとししないでください。9 私は黙し、口を開きません。あなたが、そうなされたからです。

すばらしい信仰の姿勢です。今、望みとしているのはあなただけです、という信仰告白です。「主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。(37:7)」そして彼らの中傷に引きずり込まれることのないように、必死に主にすがっています。

10 どうか、あなたのむちを私から取り除いてください。あなたの手に打たれて、私は衰え果てました。11 あなたは、不義を責めて人を懲らしめ、その人の望むものを、しみが食うように、なくしてまわられます。まことに、人はみな、むなしいものです。セラ

体の痛みによって、それが神からの鞭、懲らしめだと感じています。そして周囲からの中傷や嫌がらせは、主が無くしてくださることを信じています。

12 私の祈りを聞いてください。主よ。私の叫びを耳に入れてください。私の涙に、黙っていないでください。私はあなたとともにいる旅人で、私のすべての先祖たちのように、寄留の者なのです。

旅人で寄留のものである、との告白は、私たちにも与えられています。「愛する者たちよ。あなた

がたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。(1ペテロ 2:11)主が間もなく来られる、だから万物の終わりも近いのだとペテロはいいます。だから、私たちはこの世にある事柄に執着することなく、つねにやがて来る御国に目を留めて、そこで祭司となり王となるという大きな使命に目を留めるべきであります。

39:13 私を見つめないでください。私が去って、いなくなる前に、私がほがらかになれるように。

ここは、怒りの目で見張っている意味で、見つめないでほしいという意味です。ヨブもそうでしたが、ダビデも体の痛み、病を神が怒りをもって自分に注目しているとみなしていました。

### 3A 嘆きの中の救い 40

40 篇は、ついに病の中で嘆いた祈りが聞かれて、主に賛美を捧げる内容になっています。けれども後半で、再び病が戻ってきているようです。

#### 1B 神への賛美 1-10

##### 1C 神の奇しい業 1-5

40 指揮者のために。ダビデの賛歌 40:1 私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、40:2 私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた。40:3 主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、主に信頼しよう。

ダビデが、切なる思いで主を待ち望んだという言葉から始まります。そして、主が祈りを聞いてくださり、彼を引き上げてくださいました。そして、歌をうたっていますが、それが「新しい歌」です。これは、主とダビデとの関係が親密なものになったことを表しています。以前もお話しました、主の私たちに対する取り扱いは、日毎に新しいものです。心が新たにされ、それで主との関係において新しい感動が与えられ、それが新しい歌になります。そしてダビデが新しい歌をうたっている間に、その姿を見て人々が神への畏れ敬いが出てくるということです。すばらしいですね、賛美によって人々を伝道し、また人を神への信頼へと導きます。

40:4 幸いなことよ。主に信頼し、高ぶる者や、偽りに陥る者たちのほうに向かなかった、その人は。40:5 わが神、主よ。あなたがなされた奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。

再びダビデの「幸いなことよ」であります。どのような人か？主を信頼している人です。高ぶる者というのは、神に信頼しないで、己の知恵や力、自分の正しさに頼っている者です。そして偽りは、心で悪意を持っているのに、滑らかな言葉、へつらいの言葉を持っている人のことです。

そして、主がなさった業や自分への計らいは数知れないと言っています。いかがですか、主は太陽や星をお造りになられたのに、こんなちっぽけな自分を顧みてくださっています。そして主の自分に対する思いは、砂の数よりも多いとあります。「神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。(139:17-18)」そして、数知れない神の御計らいに対して、私たちは応答しているでしょうか？どれだけの神の思いに私たちが応じて、神のことを考えているでしょうか？ダビデは応答しようとしています。「私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。」と言いました。

### 2C 御心への服従 6-10

40:6 あなたは、いけにえや穀物のささげ物をお喜びにはなりませんでした。あなたは私の耳を開いてくださいました。あなたは、全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、お求めになりませんでした。40:7 そのとき私は申しました。「今、私はここに来ております。巻き物の書に私のことが書いてあります。40:8 わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」

ダビデは主に対して、賛美をささげただけでなく、主の声に聞き従う、その従順も捧げました。ここでとても大切な言葉があります。いけにえ、穀物の捧げ物、全焼のいけにえ、罪のためのいけにえこれらのものを、主は喜ばれないということです。これらのものを捧げなさいと言われているのに、なぜ喜ばれないのか？神の喜ばれるのは、そのようないけにえの物理的行為ではないのです。そうではなく、御霊によって神が私たちに語られ、それを聞き、聞くだけでなく自分を従わせることを喜ばれるのです。

このことは旧約聖書に数多く書かれています。サムエルがサウルに対して、そのことを語りました。アマレク人を滅ぼして、羊や牛も、男女も、乳飲み子も聖絶しなければいけないと主はサムエルによって語られました。サウルはしかし、アマレク人を殺しましたが、王は生け捕りにし、牛や羊、子羊の上等なものは残しておきました。そしてサムエルが来た時に、「私は主の命じられることを守りました。そして、こうしていけにえまで捧げようと思って、上等なものを残しておいたのです。」と言ったのです。確かに、一部は守っているのです。しかし、王をいけどりにして、上等なものを残すということで、これを神ではなく自分の手柄にしたいのです。しかも、これを捧げるということで、サムエルだけでなく自分自身も、祭司のようにいけにえを捧げることができるのだ、自分は霊的にも人々を導くのだという高ぶりに陥りました。

そこでサムエルは言いました。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた。」(1サムエル 15:22-23)「いかがでし

ようか、私たちが主の命令に従う時に、自分の都合や自分のしたいことに合わせて一部だけしか従っていないということはないでしょうか？そして、それをもってかえって自分は神に従っているのだとしていないでしょうか？サウルのように自分を捨てないままで、神に捧げているふりをするのが、ユダヤ人の中で数多く起こったので、イザヤも、ミカなど預言者たちが、その過ちを正しました。

そして、実はここはキリストを預言する箇所となっています。ダビデは詩篇の中で、自分の経験を話しながら聖霊によって、後に来るキリストを預言することが多いですが、ここもその箇所です。まず、6節、「あなたは私に耳を開いてくださいました。」というのは、元々は出エジプト記21章で、奴隷が七年間、主人に仕えても、主人を愛しており、去りたくないというならば、戸や柱のところまで連れて行き、耳をきりで刺し通す儀式を行なうことが書かれています(5-6節)。自分をすべて主に明け渡す行為です。

そこで、預言者イザヤは、キリストがヤハウエのしもべとして次のように預言しました。「神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに、私を呼びさまし、私の耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。神である主は、私の耳を開かれた。私は逆らわず、うしろに退きもせず、打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。(50:4-6)」したがって、主イエスはご自身が神の見分であられるのに、自ら父なる神を愛し、御父の聲に聞き従い、そして十字架の卑しめを受けられました。

7-8節の「私」はキリストご自身です。ヘブル書10章5-7節に引用されています。聖書にある巻に記されているとおりに、神の御心を行なうために自分の体を作ってくれたことが書かれています。そこでヘブル書の著者は、旧約時代は動物のいけにえが捧げられていたが、それでは罪の赦しは完全ではなかった。罪が思い出されてしまう。しかし、イエスがご自身を完全に捧げて、成し遂げられた救いは、私たちの罪を完全に取除き、永遠の聖めを与えてくださるというものであります。すばらしいです、私たちの罪は過去のものだけではなく、今も、そして将来もいっさいを取り除いてくださり、それで永遠の救いが保障されているのです！

40:9 私は大きな会衆の中で、義の良い知らせを告げました。ご覧ください。私は私のくちびるを押えません。主よ。あなたはご存じです。40:10 私は、あなたの義を心の中に隠しませんでした。あなたの真実とあなたの救いを告げました。私は、あなたの恵みとあなたのまことを大いなる会衆に隠しませんでした。

キリストがなされた業、ダビデの時代にとってはこれからキリストが行われる業のことを、「義の良い知らせ」と呼んでいます。キリストが行われたことが義です。それは、私たちの罪のために死んでくださり、神の義を私たちに移してくださったことです。そしてキリストが代わりに私たちの罪をご自身に負ってくださったことです。それをダビデは、あなたの真実と救い、あなたの恵みとまこと

と言っています。

## 2B 追いつく災い 11-17

そして以前の詩篇にもありましたが、ダビデは賛美の高嶺にまで導かれたところから、再び苦しみの中での叫びへと落ちていきます。

## 1C あざ笑う者への卑しめ 11-15

40:11 あなたは、主よ。私にあわれみを惜しまないでください。あなたの恵みと、あなたのまことが、絶えず私を見守るようにしてください。40:12 数えきれないほどのわざわいが私を取り囲み、私の咎が私に追いついたので、私は見ることもできません。それは私の髪の毛よりも多く、私の心も私を見捨てました。

おそらく、病状が再び悪化したものと思われます。主の御計りが数知れないと先ほどは賛美しましたが、今は、その病が押し寄せてきて、そこで思い出される咎も数えきれないほど押し寄せてきています。

40:13 主よ。どうかみこころによって私を救い出してください。主よ。急いで、私を助けてください。40:14 私のいのちを求め、滅ぼそうとする者どもが、みな恥を見、はずかしめを受けますように。私のわざわいを喜ぶ者どもが退き、卑しめられますように。40:15 私を「あはは。」とあざ笑う者どもが、おのれの恥のために、色を失いますように。

押し寄せてくる咎によって、ダビデ自身が滅んでしまったら、それこそ敵が喜んでしまいます。それだけはしないでください、と願っています。たとえ自分が罪を犯した者であっても、神が自分を救ってくださるからこそ、神の御名がほめたたえらえるのだ、ということです。

## 2C 救いを愛する者の賛美 16-17

40:16 あなたを慕い求める人がみな、あなたにあって楽しみ、喜びますように。あなたの救いを愛する人たちが、「主をあがめよう。」と、いつも言いますように。

私たちも、この祈りを自分のものにしたいです。主を慕い求める者たちが、また主の救いを愛する者たちが、喜んでいられるように、楽しんでいられるようにという祈りです。主を慕い求めていますか、主の救いを喜んでいますか？この中にある交わりこそが優れています。その他の事柄での喜びと楽しみではなく、主ご自身とその救いについての喜びです。

40:17 私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私の助け、私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。

主とその救いを喜ぶ者は、逆を返すとこの世においては悩む者、貧しい者となります。主ご自身以外には自分には何も残らないということです。心の貧しい者は幸いです、ということです。悲しむ者は幸いです、というイエス様の言葉のとおりです。

#### 4A 弱者への心遣い 41

そして最後です。ダビデは病の中にいます。彼は健常な時、弱い者につく人でした。今、自らが病の中にいます。けれども、自分が親切にして、憐れんだ人々が、そうではなく裏切るのを目にしています。

#### 1B 裏切り者からの救い 1-9

41 指揮者のために。ダビデの賛歌 41:1 幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。主はわざわいの日にその人を助け出される。41:2 主は彼を見守り、彼を生きながらえさせ、地上でしあわせな者とされる。どうか彼を敵の意のままにさせないでください。41:3 主は病の床で彼をささえられる。病むときにどうか彼を全くいやしてくださるよう。

ダビデは、弱っている者たちにいつも心を寄せていました。午前礼拝で学びましたが、心を寄せているのは自分探しても単なる同情でもなく、共に悩み、共に苦しみ、その痛みを共有していたこととあります。そして、そのような人は同じように憐れみを受けることができるということです。イエス様の言われた、憐れむ者は幸いです、その人は憐れみを受けるからということです。

41:4 私は言った。「主よ、あわれんでください。私のたましいをいやしてください。私はあなたに罪を犯したからです。」41:5 私の敵は、私の悪口を言います。「いつ、彼は死に、その名は滅びるのだろうか。」41:6 たとい、人が見舞いに来ても、その人はうそを言い、その心のうちでは、悪意をたくわえ、外に出ては、それを言いふらす。41:7 私を憎む者はみな、私について共にささやき、私に対して、悪をたくらむ。41:8 「邪悪なものが、彼に取りついている。彼が床に着いたからには、もう二度と起き上がれまい。」41:9 私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。

人間の罪深さをここで見ますね。これら悪口を言っている人々は、ダビデに何か悪いことをされた訳ではありません。むしろ、ダビデから良くしてもらった人々でしょう。しかし、彼がいつ死ぬのか、とか、彼に悪霊が付いてしまっているとか、心ないことを話しています。見舞いの場では口には出しませんが、本人たちはダビデの耳には入っていないと思っていますが、誰かのつてでもう聞いているのです。

そして9節を読めば、実はダビデのこの言葉も、キリストの預言であることが分かります。ヨハネ 13章 18節で、イエス様はご自分を裏切るイスカリオテのユダがこの預言を成就させていると話しておられます。イエスは、イスカリオテのユダには他の弟子たちと同じように、

したがって、ダビデの病は実はキリストが悲しみの方であり、病を担われたことを予め表していたと言えるのです。ここまで私たちは読んできましたが、ダビデの経験はキリストが後に経験されることを示していたと言えます。彼は自分の罪を思い起こしていますが、キリストは病あるいは、打たれた打ち傷や十字架上の肉体の傷の中に、私たちの罪を宿しているその痛みを担われていました。

## 2B 御前での立ち上がり 10-13

41:10 しかし、主よ。あなたは私をあわれんでください。私を立ち上がらせてください。そうすれば私は、彼らに仕返しができます。41:11 このことによって、あなたは私を喜んでおられるのが、わかります。私の敵が私に勝ちどきをあげないからです。41:12 誠実を尽くしている私を強くささえ、いつまでも、あなたの御顔の前に立たせてください。41:13 ほむべきかな。イスラエルの神、主。とこしえから、とこしえまで。アーメン。アーメン。

ダビデは裏切る者たちに対して、仕返しを願い求めています。しかし、よく見てください、彼は裏切る者たちにどのような仕返しを願っているか？ダビデが神から憐れみを受けて、ダビデが立ち上がることができることが、相手に対する仕返しです。ダビデが倒れるのではなく、ダビデが主にあって喜んでいるのを見ることが、敵の面目をつぶすことなのです。このように大胆にいることによって、彼の心に神を賛美する声が生まれました。そして神がとこしえにほめたたえられるようにと歌っています。そして最後の、「アーメン。アーメン。」というのは、ダビデの声に対して民が呼応しているものだと思います。

そうですね、私たちは敵に負けたくないものです。たとえ裏切られても頑固に、善を行なっていきたいです。キリストにあって愚かでいたいです。賢くなることが世では教えられます。上手に生きていくことが大事にされます。そうでないと、相手を馬鹿にする社会です。けれども、それでも誰によっても、キリストにある神の愛、自分に御霊によって注がれる愛を冷やすことはしたくありません。この方に満たされて、それで喜びに溢れて、そして悩んでいる人と共に悩み、いっしょに主を慕い求めていきたいです。敵の思う壺にはなりたくないです。